

「研究論文」

小学校英語教育における海外の学校との遠隔授業のための チェックリストの開発

Development of a Checklist for Distance Learning with Overseas Schools
in Elementary School English Education.

倉田伸・大山璃子・鈴木章能・中村典生・松元浩一（長崎大学）

Shin KURATA, Riko ŌYAMA, Akiyoshi SUZUKI, Norio Nakamura, Kōichi MATSUMOTO

1. はじめに

日本の初等教育では、遠隔授業が長きにわたって実践されており、今日ますます重視されている。例えば、文部科学省（2018a）は、遠隔授業を総合的・継続的に推進していく必要性を明確に打ち出している。このことを受けて、本論では遠隔授業について議論を展開するのだが、その前に言葉の定義をしておきたい。現在、「遠隔教育」や「オンライン授業」など、遠隔授業に類似する言葉が多くあり、それぞれ学び方が微妙に異なっている。混乱を避けるために、本研究では、遠隔授業という言葉をもとに、文部科学省（2021）が示している定義を参考に、「遠隔教育システムを活用した同時双方向型の授業」とする。

さて、日本の小学校英語教育では近年、とくに海外との遠隔授業が注目されている。文部科学省が発行する授業事例に関する資料「外国語の指導における ICT の活用について」（2018b）では、世界の国々の生活に興味・関心を持つことをねらいとした自分たちの生活を紹介し合う事例や、家庭科と連携した事例などが、英語話者との「本物のコミュニケーション」を実現する有効な手段として示されている。海外の学校との遠隔授業は、海外で生活する児童とリアルタイムで対話できるため、その背景にある文化を踏まえた上での相手意識を高めた対話を実現する。つまり、海外の学校との遠隔授業は、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら、考えなどを形成・再構築する重要な学びとなりうる。また、2020年度より始まった小学校高学年での英語教育の教科化（小学校外国語科）では、英語の暗記だけではなく、その背景にある文化を捉え、相手意識を高めた対話を通して「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を身につけることが重視されている。そのため、海外の学校との遠隔授業の必要性がこれまで以上に高まっている。加えて、近年の5G（超高速インターネット環境）導入を背景に、今後は遠隔授業がさらに普及していくと予想される。これらのことから、小学校外国語科で海外の学校との効果的な遠隔授業の実践がますます期待される。

一方で、小学校英語教育に限ったことではないが、初等教育における教科担任制の導入が検討されている。中教審初等中等教育分科会特別部会が小学校の教科担任制の導入案を2021年に公表したが、この背景には小学校外国語科の設立がある。よって、ICT整備環境のようなインフラに関する面だけでなく、専門家の人材拡充の面からも、海外の学校との遠隔授業は過去と比較して導入しやすくなったといえる。そのため、小学校外

国語科を担当する教師などが海外の学校との遠隔授業を効果的に実施するために必要な工夫やスキル（以後、授業スキル等と表記する）について検討することが急務である。

海外の学校とつないだ遠隔授業が実践事例についてであるが、小学校の英語教育ではそれほど多くないものの、いくつかのものが報告されている。例えば、長野県伊那市の小学校とカンボジアの学校をつないだ遠隔授業がある（竹生・足助 2017）。この授業を通して、遠隔授業を継続して行うことによる日常的な会話力向上の可能性が示された。ほかにも、沖縄県の小学校とハワイ州の小学校をつないだ遠隔授業がある（興儀 2009）。この授業は、技術的課題、実践時期、連携協力体制、パートナー校選定などの授業設計についての事前検討が重要であることを明らかにした。さらに、長崎県の五島とハワイ州のオアフ島の小規模学級同士をビデオ会議ツールでつないだ遠隔授業も見逃せない（中村ほか 2018）。この授業は、授業設計に加え、実践で用いる語彙や発話のスピード、声の大きさなどの面で、児童の活動を教師が適切に支援することが、海外の学校との遠隔授業の成功につながることを明らかにした。つまり、海外の学校との遠隔授業を効果的に実践していくためには、授業前後を含めた教師の授業スキル等が重要であるといえる。

ところで、遠隔授業を実践するための教師の授業スキル等については、いくつか提言されており、主な提言に Thach and Murphy (1995) によるものがある。彼らは、遠隔教育の専門家の役割と能力を明らかにするために調査を行った結果、遠隔教育における 10 のコンピテンシーモデルを提案している。日本においても、文部科学省 (2021) が、効果的な遠隔合同授業をおこなうための授業スキル等を整理している。しかし、小学校英語教育における海外の学校との遠隔授業を教師が効果的に実践していくための具体的な授業スキル等については未だ検討されていない。このことは、海外の学校との遠隔授業に効果的な教師の授業スキル等の指針を示すことにつながるため、検討する意義がある。

本研究は、小学校英語教育における海外の学校との遠隔授業に効果的な教師の具体的な授業スキル等を提案することを目的とした。そのために、小学校の英語教育の中で海外の学校との遠隔授業を実践した際に有効であった事例を整理し、海外の学校との効果的な遠隔授業を行うための具体的な授業スキル等をリスト化した。

2. 調査・分析方法

海外の学校との遠隔授業の経験を持つ指導者に対して、半構造化インタビューによる調査を行った。インタビューでは、10 のコンピテンシーモデル (Thach and Murphy 1995) をもとに、鄭・久保田 (2006) が整理した教授者が身に付けておくべき 6 つの基本能力を参考にして、それぞれ質問した。1 つ目は「授業に対する企画力」である。本研究では、このことを海外の学校との遠隔授業当日までの準備とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業の企画・設計で、授業担当者として重要視したことは何でしたか」とした。2 つ目は「内容に関する専門性」である。本研究では、これを海外の学校との遠隔授業に関する専門性とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業を行う上で、授業担当者として持つておかなければならないことは何だと思いますか」とした。3 つ目

は「コミュニケーション能力」である。本研究では、海外の学校との遠隔授業中の児童同士の対話を促す行動とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業を行う際に、授業担当者として授業のコミュニケーションを活発にするために重要視したことは何でしたか」とした。4つ目は「フィードバック技術」である。本研究では海外の学校との遠隔授業中の形成的評価とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業中に、授業担当者として児童との活動をフィードバックする際に気を付けていたことは何でしたか」とした。5つ目は「学習内容の提示技術」である。本研究では海外の学校との遠隔授業中のデジタル情報発信方法とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業中で、授業担当者として授業内容を情報発信する際に重要視していたことは何でしたか」とした。6つ目は「評価技術」である。本研究では海外の学校との遠隔授業後の総括的評価とみなし、質問内容を「海外の学校との遠隔授業を最終的に評価する際に、授業担当者として重要なことは何だと思えますか」とした。

質問対象の教師は2名である。1人目は、外国語指導助手・指導員として10年間の勤務経験がある教師（以下、教師A）である。2人目は、小学校教諭として34年間勤務経験がある教師（以下、教師B）である。両者とも日本とアメリカ合衆国の児童同士の交流を直接指導した経験を持つ。

分析方法は、インタビュー調査で得た逐語記録を、上記の6つの質問ごとに分類し、海外の学校との遠隔授業に関係する部分を抽出したあとで各部分を整理し、チェックリスト項目化した。チェックリスト項目化は、第1著者と第2著者が共同で行い、意見が異なった場合は協議で決定した。その後、チェックリスト項目の採用・不採用、および、細かな文言等の修正については、本論の著者全員で協議した上で決定した。

3. 結果・考察

インタビュー結果をふまえて開発した海外の学校との遠隔授業を実施するためのチェックリストを表1に示す。以降、6つの基本能力別に結果と考察を示す。

3.1 海外の学校との遠隔授業までの準備

(1)「交流の目的・双方の文化・現在の学習段階など、早い段階で情報共有しているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「日本の学校のこととか英語教育のこととか学校の文化っていうのも多分分からない。外国の学校も同じように日本とは違うので、できるだけ最初の企画している段階でそういう情報を共有したのがよかったなと思います。(中略)子どもたちはこれが分かる、でもこれだったら難しいっていうふうに(先方の)先生に伝えた(教師A)」。このことから、話し合いでの細かな確認を通して交流の目的、学校のことや児童の学習状況などをできるだけ早い段階で明らかにすることが重要だと考えられる。

(2)「児童は遠隔授業に対して十分に慣れているか」という項目を設定した。インタビューへの回答は次の通りである。「どう、子どもたちがうまく発表できるように指導するか。(中略)うなずくとか、大きくI see.とか、そういうリアクション。そういうスキルをまず

表 1 海外の学校との遠隔授業を実施するためのチェックリスト

| |
|---|
| 1. 海外の学校との遠隔授業当日までの準備 |
| (1) 交流の目的・双方の文化・現在の学習段階など、早い段階で情報共有しているか。 (2) 児童は遠隔授業に対して十分に慣れているか。 (3) 双方の児童が興味を持てる題材か。 (4) 言葉（英語）以外の視覚的な教材を準備しているか。 (5) 児童をうまく動かす体制づくりは十分か。 |
| 2. 海外の学校との遠隔授業に関する専門性 |
| (6) 遠隔授業に関する ICT の基礎的な知識や技能には自信があるか。 (7) 遠隔授業で使用できそうなコンテンツを準備しているか。 (8) 相手の学校や文化に関する情報について調べたか。 (9) 英語が苦手である場合どうにかして意思疎通を図ろうとする心構えがあるか。 |
| 3. 海外の学校との遠隔授業中の児童同士の対話を促す行動 |
| (10) 教師自ら英語で話したり、答えたり、問いを投げかけたりしているか (11) 双方の児童が理解できる文法レベルに合わせて話しているか (12) 児童が自信や興味をもち、安心して自由に発言できる場面を作れているか (13) 事前に準備したテーマを会話に取り入れられているか。 |
| 4. 海外の学校との遠隔授業中の形成的評価 |
| (14) 児童の活動の良い面を常にフィードバックできているか (15) 児童が達成感を得られるようフォローできているか |
| 5. 海外の学校との遠隔授業中のデジタル情報発信方法 |
| (16) 視覚的な支援ができているか (17) 児童の発表がわかりやすく伝わるための指導ができているか (18) 情報発信する機器や方法は児童が十分に慣れているものか |
| 6. 海外の学校との遠隔授業後の評価 |
| (19) 児童の興味・関心について評価しているか。 (20) 多面的な視点で評価しているか。 (21) 事前の準備活動も含めて評価しているか。 (22) 発音などの改善点はプラスのことに変えて伝えているか。 |

子どもたちに教えられるかが大事（教師 A）」「事前に、どの場面でどの指示をどんなふうに出すかを考えるべき（教師 A）」。このことから、どの指示をどの場面でどのように出すかを考え、児童が安心して発表できるよう十分に準備することが重要だと考えられる。

(3)「双方の児童が興味を持てる題材か」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「話題を決めている段階で分かりそうな話題にしないと難しい（教師 A）」「設計とかで一番核になったのはギブ・アンド・テイクっていうか、こっちも与えて、相手からも私ももらうというような情報ですかね。（中略）興味持つものを、終わった後に面白かった、参加してよかったというふうになるようなことを一番考えていました（教師 B）」。このことから、文化のことや学校生活などの日常のことなど双方が興味を持てるもの、面白いと思えるもの、理解しやすいものを題材にすることが重要だと考えられる。

(4)「言葉（英語）以外の視覚的な教材を準備しているか」というチェック項目を設定した。インタビューへの回答は次の通りである。「英語がそんなに、小学校教諭は堪能ではないので、分からなくても何とかなるコミュニケーションのツールの準備が必要で、（中略）何とかこう、示すための、視覚的に分かるものが必要だと思います（教師 B）」。このこと

から、英語以外のコミュニケーションツールの準備（イラスト、写真、動画を見せるなど、視覚的にわかりやすいものを準備するなど）が重要だと考えられる。

(5)「児童をうまく動かす体制づくりは十分か」というチェック項目を設定した。インタビューへの回答は次の通りである。「(授業を) 回す、(児童の) 動かし方とか、そういうことは必要 (教師 B)」。このことから、当然ではあるが、海外の学校との遠隔授業を行う学級の体制が十分に整っていることが重要だと考えられる。

3.2 海外の学校との遠隔授業に関する専門性

(6)「遠隔授業に関する ICT の基礎的な知識や技能には自信があるか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「Zoom とか、まず IT(ICT)スキルからだと思います。他のことができていても IT(ICT)のスキルがなければ、まずうまくいきません (教師 A)」、「Google Meet や Zoom とか、やはりそういう画面越しに会議ができるような、その運営の仕方的なものは絶対必要 (教師 B)」。このことから、遠隔授業に必要な ICT に関する基本的な知識や技能を身につけることが重要だと考えられる。

(7)「遠隔授業で使用できそうなコンテンツを準備しているか」というチェック項目を設定した。インタビューへの回答は次の通りである。「何が必要かっていったら、企画力と、相手にこういうコンテンツで今回話をさせたいんだっていう持ち込みをしっかりとできる力が必要。(中略) コンテンツをつくるっていうのが、意外と大事ななと思いますね (教師 B)」。このことから、海外の学校と遠隔授業を行う際のコンテンツ（遠隔授業に使えるような題材）を十分に持っているかが重要だと考えられる。

(8)「相手の学校や文化に関する情報について調べたか」というチェック項目を設定した。インタビュー回答は次の通りである。「頻繁にやりとりするので、SNS とかでとにかく会話を多くして、つながるようにするっていうのがとても大事 (教師 B)」。このことから、海外の学校と交流する際は、お互い知らないことが多い可能性があるため、積極的に情報共有しようとする行動が重要だと考えられる。

(9)「英語が苦手である場合、どうにかして意思疎通を図ろうとする心構えがあるか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「(英語が) 下手でも一生懸命、意思疎通を図るようなこと (教師 B)」。このことから、英語力が不十分であっても、粘り強くコミュニケーションを図ろうとする態度が重要だと考えられる。

3.3 海外の学校との遠隔授業で児童同士の対話を促す行動

(10)「教師自ら英語で話したり、答えたり、問いを投げかけたりしているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「興味を持って話したくなるコンテンツを用意するっていうのは、まず一番大事。さらにそれを英語で話せるか、または、それを使って英語で答えたり、投げ掛けたりできるかとか (教師 B)」。このことから、自ら設定したテーマやコンテンツに関する基礎的な英単語を知っておくこと、また、それについて児童に英語で話しかけたり問いを投げかけたりするような行動が重要だと考えられる。

(11)「双方の児童が理解できる文法レベルに合わせて話しているか」というチェック項

目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「英語をわかりやすく言い換える力はとても必要（教師 A）」、「基本表現みたいなものが單元ごとにあるので、それにマッチしたようにつくっていく（教師 B）」。このことから、日本の児童の英語スキルが不十分だと予想されるため、日本側の児童のレベルに合わせた英語表現で教師が話すことが重要だと考えられる。

(12)「児童が自信や興味をもち、安心して自由に発言できる場面を作れているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「最初から伝わらないよっていうふうにゴールを低くしたほうがいい。(中略)最初から伝わるって子どもが思っていたら伝わらなかったときのショック、ダメージが大きい(教師 A)」、「小グループで同じことを言いながら、でも、最後のとこだけ違うっていうか、自分の好きな物を言うとかっていう、そういう体制をしていくと、コミュニケーションが活発に。活発というか、安心してできる(教師 B)」。このことから、英語で伝わらないことは必ずあるということを経験的に児童に伝えておくことで心理的ハードルを予め低く設定しておき、何度も再挑戦できるような配慮が重要だと考えられる。また、正しい英語表現だけを児童に求めるのではなく、自分が相手に伝えたいことを自由に発言できる雰囲気づくりが重要だとも考えられる。

(13)「事前に準備したテーマを会話に取り入れられているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「まずみんな緊張していますし、フリートークにしても多分、誰も何も言わないので、最初の半分、ほとんどでもいいと思うんですけど、決めた内容で話してもらいたい形でした(教師 A)」「(事前にいくつか準備したテーマを)選んで話す(活動)は、(授業中)使っていますね。ほとんど、それ土台です(教師 B)」。このことから、テーマやコンテンツを会話中に示したり、児童に選ばせたりすることで、事前に準備したテーマやコンテンツを上手く会話に取り入れることが重要だと考えられる。

3.4 海外の学校との遠隔授業中の形成的評価

(14)「児童の活動の良い面を常にフィードバックできているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「授業中でも授業の後でも、とにかくさんほめることが大事(教師 A)」、「(児童が)真似して言って、それでかえって逆に良かったっていうのを、特に取り上げてフィードバックはしてたと思います。(中略)あとは、リアクションを出してるとかね。覚えたリアクションをすぐ使ってるとか。あと、続けて質問を自分からもするとか(教師 B)」。このことから、ネイティブの英語を積極的に取り入れたり、リアクションを頑張っていたり、質問をしたりする児童の活動など、良い面に注目して常に褒めるような肯定的なフィードバックの量が重要であると考えられる。

(15)「児童が達成感を得られるようフォローできているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「私が画面上でそれ(間違い)を少し補ってあげている。(中略)これで達成感があるっていう。子どもはなんか話せたとか、分かった、みたいに感じに終わってる(教師 B)」。このことから、直接間違いを指摘する

のではなくさりげなく補ってあげることや、児童に「会話をすることができた」と思わせるような教師のフォローや足場かけが重要だと考えられる。

3.5 海外の学校との遠隔授業中のデジタル情報発信方法

(16)「視覚的な支援ができていないか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「可視化。目で見て分かるようにする。(中略) 囲む、矢印、ポインター当てる。そんな感じで会話しました(教師 B)」。このことから、視覚的なメディアの活用をするなど、児童が目で見ても直感的に行動できるような支援が重要だと考えられる。

(17)「児童の発表がわかりやすく伝わるための指導ができていないか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「子どもがゆっくりはっきり言えるように指導しました(教師 A)」、「カメラ目線とかそういうことですね、カメラを見るとか(教師 A)」。このことから、対面の活動と比較して伝わる情報が少ない遠隔授業において正確に情報が伝わるために、児童がゆっくりはっきり発表できるための指導や、カメラとの向き合い方の指導を行うことが重要だと考えられる。

(18)「情報発信する機器や方法は児童が十分に慣れているものか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「とにかく子どもの負担にならないものが一番大事かなと。普段やってる、使ってるもの(機器)がいい。(中略) 子どもに合ったやり方でやったほうが、普段やってることを考えながら作ったほうがいいと思います。新しいこと、すでに盛りだくさんあるので(教師 A)」「子どもたちに任せるっていうか、子どもたちが主になって発表できるようにしたほうがいい経験かなと。(中略) 交流に合った効率的なやり方がいい(教師 A)」。このことから、児童の負担にならない方法で主体的に発表できる方法を採用したり、交流に合った効率的な方法を採用したり、児童の得意不得意を考慮した授業にすることが重要だと考えられる。

3.6 海外の学校との遠隔授業後の総括的評価

(19)「児童の興味・関心について評価しているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「一番大事なのが、子どもたちがどんなふう感じたのか。そこがメインかなと思います。(中略) 子どものフィードバックを見てたら達成感があったり、伝わったというその喜びが結構(感想文に)書いてあったりした(教師 A)」、「あとはやはり、楽しんでいるかどうかということ(教師 B)」。このことから、まずは海外の児童との交流自体に興味を持つことが重要だと考えられる。

(20)「多面的な視点で評価できているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「1つのことだけでなく子どもたちがこの経験をとおして何を得たのか。それを大きく見たほうがいい(教師 A)」、「主体的に考えているようなところも、評価には大事なかもしれない(教師 B)」。このことから、児童が遠隔授業を通して得たことを多面的な視点で評価をすることが重要だと考えられる。

(21)「事前の準備活動も含めて評価しているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「評価するときは授業当日だけでなく、それま

での過程を見たほうが良い（教師 A)」。このことから、当日の遠隔授業だけではなく、これまで準備してきた過程も含めて評価することが重要だと考えられる。

(22)「遠隔授業後に改善すべき点を伝えているか」というチェック項目を設定した。インタビューの回答は次の通りである。「別に駄目とかじゃなくて、こんなふうに言ったら伝わらないよね、どうしたらいいかな、こんなふうにすればいいねとか。駄目とかじゃなくて、伝わるようにどうすればいいっていう話につなげるのが大事（教師 A)」。このことから、次回に向けて努力すべき内容を児童に理解させることが重要だと考えられる。

4. まとめ

本研究は、小学校英語教育における海外の学校との遠隔授業に効果的だと思われる教師の具体的な授業スキル等を提案するため、海外の学校との遠隔授業を実践した経験がある教師からのインタビュー結果の分析をとおして、表 1 のような海外の学校との遠隔授業を実施するためのチェックリストを開発した。今後は、このチェックリストから海外の学校との遠隔授業特有の項目を検討したり、難易度別に分類したり、教員研修などで有効活用できるツールへ改良したりする予定である。

参考文献

- 鄭仁星・久保田賢一 (2006). 遠隔教育と e ラーニング. 北大路書房.
- 文部科学省 (2018a). 遠隔教育の推進に向けた施策方針. 文部科学省.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/14/1409323_1_1.pdf (2022 年 3 月 23 日)
- 文部科学省 (2018b). 外国語の指導に置ける ICT の活用について. 文部科学省.
https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_13.pdf
(2022 年 3 月 23 日)
- 文部科学省 (2021). 遠隔教育システム活用ガイドブック第 3 版. 文部科学省.
https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_jogai01-000010043_002.pdf
(2022 年 3 月 23 日)
- 中村典生・倉田伸・松元浩一・鈴木章能 (2020). ICT を用いたハワイ・オアフ島と五島の小学校の英語交流授業について. 長崎大学教育学部紀要, 6, 141-147.
- 竹生秀之・足助武彦 (2017). 伊那における遠隔授業. 日本デジタル教科書学会発表予稿集 日本デジタル教科書学会第 6 回年次大会 (pp. 63-64). 日本デジタル教科書学会.
- Thach, E. C., & Murphy, K. L. (1995). Competencies for distance education professionals. *Educational Technology Research and Development*, 43(1), 57-79.
- 與儀峰奈子. (2009). ICT 遠隔交流を通じた国際理解. 琉球大学教育学部紀要, 74, 69-87.